

授業評価アンケートの設計と 実施に関する学生参加の可能性の検討

辻 義 人

1. はじめに

2009年4月に四年制大学への進学率が50%を超え、高校課程修了者の半数以上が大学教育を受けることとなった(文部科学省, 2009)。これは、多くの若者にとって、大学教育がより身近になったことを示すものといえる。

大学進学率の上昇に伴い、大学が果たすべき役割への注目が高まっている。大学は、学生に対して実施している教育活動の目的と内容、そして、その教育活動から期待される教育成果などを、社会に広く公開する必要に迫られているのである。

1.1 大学における教育改善の経緯

教育成果の質保証に関して、大学における組織的な教育プロセスの検証と見直しの経緯に注目する。文部科学省(1998)は、大学組織としての教育活動の改善、すなわち、ファカルティ・ディベロップメント(以下、FD)に関して、以下のような指摘を行った。「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修(ファカルティ・ディベロップメント)の実施に務めるものとする旨を大学設置基準において明確にすることが必要である」この指摘に関連して、1999年の大学設置基準の改正では、FD活動の努力義務規定が加えられている。

その後、文部科学省(2005)は、大学院におけるFD活動の義務化を提言した。これを受けて、2007年に大学院教育課程、2008年に学士教育課程におけ

る FD 活動が義務化された。現在、多くの大学において、教育活動の検証と改善を目的とした組織が設立されている。2009 年には、全国の国公私立大学の約 80.0%にあたる 603 大学で、組織的 FD 活動が実践されていることが報告されている（文部科学省、2011）。

1.2 学生を対象とした授業評価アンケート

大学における FD 活動として、多様な取り組みが行われている。例として、教員同士の授業参観や研修会、新任教員を対象とした FD 研修会、初年次生を対象としたカリキュラムの開発、ベスト・ティーチャーの表彰などが挙げられる。なかでも、大学における FD 活動の代表的な取り組みとして、学生を対象とした授業評価アンケート（以下、学生授業評価）が挙げられる。

学生授業評価の目的は、主に以下の二点である。第一に、教員の授業改善の指針の獲得である。個別の授業科目に対する学生の評価や要望について、数量的・定性的調査を実施する。教員は、収集された意見に基づき、自身の授業のフィードバックを獲得することで授業改善が可能となる。第二に、教育機関としての大学の効果検証である。学生は個々の授業をどの程度理解し、満足しているのだろうか。この調査を通して、大学における教育活動の適切さを検証することが可能である。これらの目的は、学生を対象とした調査結果を、教育活動の検証と改善に繋げる点において共通している。本論文では、学生授業評価の役割としての授業改善に注目する。

学生授業評価の教育的意義は、調査結果を授業改善に活用し、学生の成長を促すことである（Astin, 1993）。Astin によると、教育活動は、教授と学習との相互作用である。学習者は、教授者との相互作用を通して、知識や技能を獲得する。このことから、教授者にとって、学習者の意見や要望は、教育活動上の貴重な手がかりといえる。また、教育場面における教授者と学習者との相互作用に関して、辻（2010）は、口頭説明場面における情報処理モデルの提案を行っている。わかりやすい説明活動を行うには、説明者（教授者）が学習者の知識や技能、置かれた状況を推測し、それに合わせた説明を構築

する必要がある。教授者は一方的に知識を伝達するだけではなく、学習者の状況を常に把握しなければならない。これらの研究は、教育活動の質の向上を意図したとき、教授者と学習者との相互的な関係が必要であることを示している。

1.3 大学における学生参加型 FD 活動

ここで、学生と教員との相互的 FD 活動に注目する。学生は、大学における FD 活動に、どのように関与しているのだろうか。大学における FD 活動が普及している一方、学生の FD 活動に参加している事例はさほど多くは見られない。以下に、学生参加型 FD 活動の特徴的な取組みに注目する。

まず、大学間連携を重視した学生 FD 活動として、山形大学の事例が挙げられる。山形大学では、東北地方の大学に通う大学生が連絡を取り合い、相互の大学の FD 活動の現状に関する情報交換を行っている。各大学の学生が希望する授業改善活動や、各大学の名物授業などの情報交換を行い、その結果を教員にフィードバックする仕組みが構築されている。この取組みを通して、学生にとって望ましい授業環境として、①集中できる学習環境であること(私語や遅刻への適切な対処)、②授業の内容が明瞭であること、③学生の質問や意見を常に受け入れる体制ができていること、これらが示された。さらに、異なる大学に所属する学生どうしの議論を通して、学生や教職員の FD に対する動機づけの向上についても期待される(山形大学, 2004; 山形大学, 2010)。

同様に、他大学との積極的な情報交換を重視した取組みとして、「学生 FD サミット」が挙げられる(立命館大学, 2011)。これは、多くの大学の教員や学生の連携を通して、各大学の FD 活動の実態や問題点について、情報交換を行うものである。この取組みを通して、全国の大学における FD 活動の現状や問題点に関する情報交換が促進される。また、授業評価の高い教員へのインタビューや、他大学との交流記録を多くの大学に公開する取組みを通して、大学の枠を超えた授業改善効果が期待される。

また、教員と学生との緊密な連携と迅速な対応を重視した学生 FD 活動として、岡山大学薬学部の取り組みが挙げられる(岡山大学, 2008)。岡山大学薬学部の取り組みは、学生と教員との意見交換が容易であり、学生の要望が教員に届きやすい小規模 FD 活動のメリットを活かしたものである。また、学生を対象とした FD 勉強会が開催され、学生に授業評価アンケートの項目を考えさせる取り組みなどが行われている。この取り組みを通して、授業評価の観点や希望する授業のあり方について、学生自身に意識させることが可能である。

このように、各大学における学生参加型 FD 活動を概観したとき、主な活動として学生と教職員との意見交換が行われていることに気づく。学生と教職員との意見交換を通して、両者の相互理解に基づく FD 活動が可能となるのである。

1.4 学生授業評価への学生の関与

学生参加型 FD 活動を概観した結果より、学生と教職員との FD 活動の連携として、主に情報共有や意見交換が行われていることが示された。しかし、学生授業評価の設計と実施に際して、学生と教職員との協働事例は、ほとんど報告されていない。なお、岡山大学薬学部においては、学生に授業評価アンケートの項目を考えさせる勉強会を開催しているが、この活動は FD に対する意識向上を目的としたものと位置づけられよう。

このように、多くの大学において、学生授業評価に際しては、学生の視点がほとんど反映されていない。ここで、学生自身に学生授業評価の質問項目を考えさせることによって、どのようなメリットがあるのだろうか。この点について、以下の二点が考えられる。第一に、学生の授業評価の観点把握が可能となることが挙げられる。FD 意識の高い教員は、学生授業評価の結果に基づき授業改善を行う。ただし、その際の観点は、教員 FD 組織によるものであり、決して学生の意見を十分に反映したものではない。学生自身に質問項目を考えさせることによって、学生はどのように授業を評価しているのか、

直接的に評価観点を把握することが可能となる。第二に、学生のアンケート調査に対する意識向上が挙げられる。学生は、学期末ごとに多くの科目で学生授業評価に回答しており、全科目に回答するには多大な時間と労力が求められる。さらに、各大学のフィードバック体制によっては、学生授業評価の効果が学生に周知されない場合もある。このとき、学生の回答意欲は著しく低下することが予想される。ここで、学生が質問項目の設計に関与することによって、学生授業評価の目的や効果の周知が可能となり、FD に対する意識向上が期待される。

1.5 本研究の目的

現在、多くの大学において、主な FD 活動として学生授業評価が実施されている。FD 活動に対する関心は、教職員のみではなく、学生にも広がりを見せている。しかし、学生授業評価の設計と実施に際して、学生が携わった事例はごく少ない。このことから、学生授業評価に学生が関与する効果について探索的検討を行う。本研究を通して期待される知見は、以下の通りである。

- ・学生が、学生授業評価の設計に関与するために必要な条件は何か。
- ・学生はどのような観点に基づき「よい授業」「よい教員」の評価を行っているのか。

なお、本研究は、学生の授業評価観点を明らかにし、教員の授業改善を支援することを目的としている。学生の授業・教員に対する評価観点を検討を通して、教員と学生との協働的 FD 活動の足がかりが得られることが期待される。

2. 方法

2.1 調査時期

本調査は、2011年7月上旬に実施した。

2.2 調査手続き

2.2.1 学生による授業評価項目の作成

被験者は、国立大学に所属する、FDに関心のある大学1年生5名であった。被験者に対し、従来から実施されている学生授業評価アンケート票を提示し、学生授業評価の目的や意義について説明を行った。続いて、被験者どうしでの議論を通して、学生の視点に基づく独自の「よい授業」「よい教員」の学生授業評価アンケートを作成するように教示を行った。この際、調査票をA4用紙で1枚にまとめるように指示した。調査項目に関する議論と選定に際して、調査者は介入を行わなかった。

2.2.2 学生授業評価の配布と回収

学生が考案した学生授業評価について、同大学に通学する学生に調査票を配布・回収した。回答時間や場所に制限は設けなかった。欠損値や回答に不備のあるデータを除外した結果、分析対象として87件のデータが得られた。

2.3 結果の分析

学生の作成した学生授業評価の質問項目を概観することを通して、学生の授業評価に対する視点を明らかにする。また、学生が授業評価アンケートの設計に関与する際の注意点について検討する。次に、学生の作成した学生授業評価に対して、どのような回答が行われていたのかについて集計する。なお、学生授業評価は、数量的項目と定性的項目（自由記述）から構成されていた。本研究では、数量的調査の結果に注目し考察する。

3. 結果と考察

3.1 学生による授業評価項目の構成

一般的に、学生授業評価はFDに関する教員組織が設計・実施しており、学生の意見が反映される機会は少ない。ここで、学生による「よい授業」「よい教員」の評価観点に注目する。学生は、どのような観点から、授業や教員を評価するのだろうか。学生の考案した授業・教員評価項目を図1に示す。

学生にとっての「よい授業」の評価基準に注目すると、「説明のわかりやす

質問1	回答者の基礎データ（学年・性別）
質問2	「よい授業」評価項目（10項目、YES/NO） ①説明がわかりやすい ②授業内容が面白い ③単位取得が容易である ④評価が甘い ⑤将来に役立ちそう ⑥宿題が少ない ⑦レポート課題が少ない ⑧出席点がある ⑨先輩や友人が勧める ⑩テストが簡単である
質問3	「よい教員」評価項目（5項目、5件法） ①話が面白い ②話がわかりやすい ③優しい ④厳しい ⑤容姿が良い
質問4	「よい授業」「よい教員」に関する自由記述

図1 学生が考案した「よい授業」「よい教員」評価項目

さ」「授業内容の面白さ」「将来に役立ちそう」「先輩や友人の勧め」については、概ね一般的な項目といえる。その一方、「単位取得が簡単」「評価が甘い」「宿題が少ない」「レポート課題がない」については、一般的な学生授業評価では、ほとんど見かけない項目といえるだろう。学生が授業を評価する際には、その授業から獲得できる知識や技能の観点のみではなく、単位取得に要する労力についても注目していることが伺える。

次に、「よい教員」の評価基準に注目すると、「話が面白い」「話がわかりやすい」に加え、「優しい」「厳しい」「容姿が良い」という項目が見られた。この結果より、学生が教員を評価する際には、授業に関する要素に加えて、教員の人柄や親しみやすさについても注目されていることが伺える。

これらの結果より、学生による授業評価の基準は、一般的に実施されている学生授業評価の質問項目と、必ずしも一致していないことが示された。特に、学生による授業評価の観点として、宿題やレポートなどの時間外学習がないことや、苦勞せずに単位が取得できることが挙げられている。これは、教育機関として目指す教育活動と、学生が期待する学習活動との認識が大きく異なっていることを示すものといえるだろう。これらのことから、学生授業評価の設計と実施に際して、学生が効果的に関与する条件として、学生が授業評価の目的と意義を正しく理解する必要があるものと考えられる。学生と教員との間で建設的な議論を行うには、学生側の授業やカリキュラムに対する理解が前提となることが考えられる。

3.2 学生の「よい授業」の評価

学生の考案した授業評価項目に基づいたとき、学生はどのような授業を「よい授業」と判断するのだろうか。調査結果を以下に示す（表1、図2）。

調査結果より、学生は授業評価の基準として、「授業内容の面白さ」「説明のわかりやすさ」に注目していることが示された。学生は授業に対して興味が持てること、また、説明がわかりやすいことを重視したことが伺える。その一方、「先輩や友人の勧め」「評価が甘い」「テストが簡単」については、よ

表1 学生による「よい授業」の評定値

質問項目	男子学生	女子学生	全体
授業内容の面白さ	82.5%	80.9%	81.6%
説明のわかりやすさ	74.4%	85.1%	80.2%
出席点がつく	82.1%	73.3%	77.4%
レポートがない	74.4%	76.6%	75.6%
宿題が少ない	76.9%	72.3%	74.4%
将来に役立ちそう	61.5%	72.3%	67.4%
単位取得が簡単	70.0%	63.0%	66.3%
先輩・友人の勧め	61.5%	55.6%	58.3%
評価が甘い	55.0%	55.3%	55.2%
テストが簡単	48.6%	53.5%	51.3%

(N=87; 男子学生 41名, 女子学生 46名)

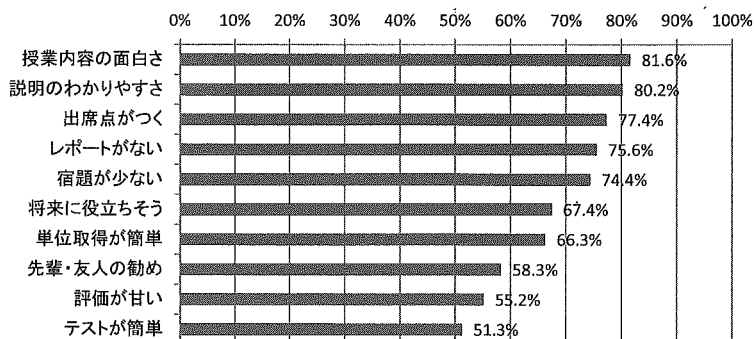


図2 学生にとっての「よい授業」の評価結果

い授業の条件として注目されていなかった。学生にとって、授業の面白さ・わかりやすさと、単位取得の容易さは異なるものと認識されていることが考えられる。また、学生は出席点の有無についても注目していた。これは、学生は、学習プロセスも評価対象とすることを期待しているものと考えられる。評価の甘さやテストの簡単さは、必ずしも高い評価がなされていないことが示された。

なお、男女間で回答の比率の差の検定を行ったところ、いずれの項目にも

有意差は見られなかった。

3.3 学生の「よい教員」の評価

学生は、どのような教員を「よい教員」と評価するのだろうか。ここでは、学生の単位取得に関する信念として、学習志向に注目した。前節の調査結果に基づき、学生の学習行動に関して、単位取得の重視度を基準に群分けを行った。単位取得が容易であることが望ましいと回答した群を容易志向群、単位取得の容易さは重視しないと回答した群を実力志向群とした。ここでは、学習志向要因と性別要因の観点から、教員に関する評価基準(5項目; 5件法)について、二要因分散分析による評定値の比較を行った。各項目の評定結果を示す(図3)。

(a) 話の面白さ

学習志向要因に主効果が認められ、実力志向群において教員の話の面白さが重視されていた($F(1,85)=14.081$, $MSe=12.907$, $p<.01$)。教員の話の面白さとして、ユーモアとしての面白さと、学術的な興味深さの二つの側面が考えられる。ユーモアについては、授業進行を工夫することによって、学生の集中を維持することができる。また、学術的な面白さは、学生の知識や技能の獲得を促進することが予想される。本調査では、実力志向群の学生がどちらの面白さを重視しているのかを判別することは困難である。しかし、実力志向群においては、授業に集中できる環境、また、学術的な面白さの強調、これらが重視されていることが示された。

(b) 話のわかりやすさ

有意な交互作用が認められ($F(1,85)=4.490$, $MSe=5.087$, $p<.05$)、単純主効果検定を行った。その結果、実力志向群の女子学生は、話のわかりやすさを重視していた($p<.05$)。教員の話のわかりやすさに影響を及ぼす要因として、多様なものが考えられる。例えば、授業の進行スピードや、提示資料の見やすさ、配布プリントの読みやすさ、メタ情報(授業のポイントの事前提示など)の有無、教員による学生の理解度の把握などが挙げられる。特

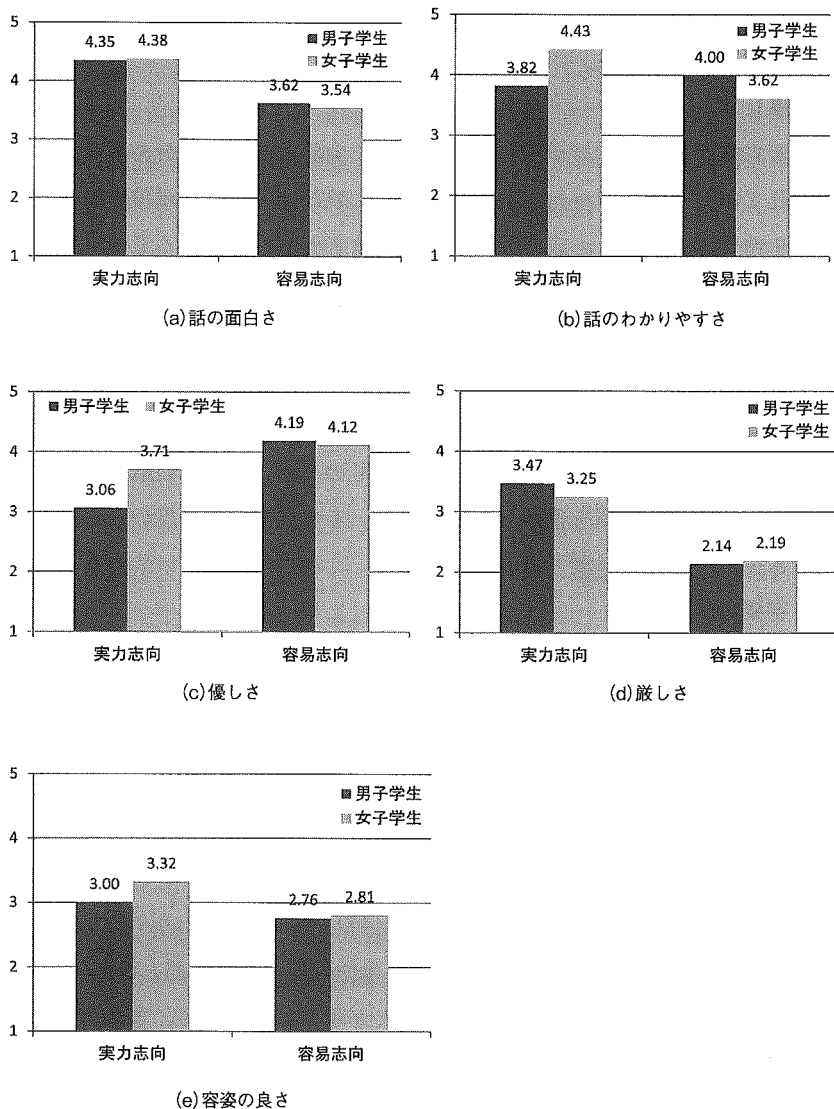


図3 学生による「よい教員」の評価結果

に、実力志向の強い女子学生は、教員のわかりやすさに対する配慮を重視していることが示された。

(c) 優しさ

学習志向要因に主効果が認められ、容易志向群において教員の優しさが重視されていた($F(1,85)=11.346$, $MSe=12.203$, $p<.01$)。単位取得が楽な授業を希望する学生は、成績評価の甘さやテストが容易であることを期待したため、教員の優しさを重視したことが伺える。

(d) 厳しさ

学習志向要因に主効果が認められ、実力志向群において教員の厳しさが重視されていた($F(1,84)=22.765$, $MSe=29.195$, $p<.01$)。本項目は、上記項目の「(c)優しさ」と対称的な関係にあるものといえる。単位取得が困難であっても、知識や技能を獲得したい学生は、ある程度、難易度の高い学習活動を希望していることが考えられる。

(e) 容姿の良さ

いずれの要因においても、主効果や有意な交互作用は認められなかった。学生にとって、教員の容姿には関心がないことが伺える。

以上の5項目の分析結果より、学生の学習志向によって、望ましいとする教員の基準が異なることが示された。知識や技能の習得を重視している学生は、教員に対して、話が面白いこと、授業がある程度難しいことを希望していた。また、女子学生においては、教員に対して、話がわかりやすいことを希望している結果が得られた。その一方、単位取得のみを目的とする学生は、優しい教員を望ましいと評価していることが示された。なお、本調査では学生の背景要因として、学習志向と性別要因に注目している。ここで、学生が期待する教員像については、他の要因も関連していることが予想される。今後、学生の専攻などの学習背景や、社会性、自己効力感などの多様な要因にも注目・比較する必要があるだろう。

4. 総合考察

4.1 学生の観点に基づく授業評価の実現可能性

学生授業評価は、教員が授業改善の指針を得るために実施される。そのため、学生授業評価の項目は、授業改善を意図して設計される。

本研究では、学生自身に学生授業評価を考案させることを通して、学生授業評価の設計への学生関与の可能性について検討を行った。その結果より、学生の授業と教員の評価観点は、授業改善を意図した従来の学生授業評価とは大きく異なることが示された。特に、宿題やレポート課題が少ない、テストが簡単、単位取得が容易であるなどの質問項目は、教員の授業改善の指針としての活用は困難であろう。このような評価観点が得られた理由として、学生の授業評価に対する理解が不十分であったことが考えられる。このことから、学生が授業評価アンケートに関与するには、事前に授業評価の目的や意義について十分に理解させる必要があるだろう。

なお、本研究ではFD活動に関心のある1年生に、質問項目を考案させている。ここで、学年の進行に伴い授業や教員に対する評価基準は変化するのだろうか。また、大学の規模や、各大学のFD活動への取組みの違いが、学生の評価基準に影響を及ぼすのだろうか。今後、さらに多様な背景を持つ学生を対象とした追試が求められる。

4.2 学生による「よい授業・教員」の評価観点

学生の「よい授業」の評価観点として、授業が面白く、説明がわかりやすいことが重視されていることが示された。その一方、評価の甘さやテストの簡単さなどについては、さほど重視されていないことが示された。この結果より、学生は知識や技能を獲得でき、さらに学習プロセスを重視した授業を高く評価していることが読み取れる。

次に、学生にとっての「よい教員」の評価基準は、単位修得に関する信念によって異なる結果が得られている。単位修得が困難でも知識や技能の獲得

を希望する学生（実力志向群）にとっては、授業に集中できる環境を構築する教員を高く評価しており、容易に単位を修得したい学生（容易志向群）は、優しい教員を高く評価していた。この点に関して、教育機関として大学が果たすべき役割を確認する必要がある。教育機関としての大学の役割は、学生に知識や技能を教授するだけではない。学生が大学を卒業し社会人となったとき、多様な変化に対応するための関心や態度の側面にも注目する必要がある。このことから、実力志向群の学生に対しては、より自発的・自律的な学習活動を促すこと、また、容易志向群の学生に対しては、単位取得のみではなく、自発的に知識や技能を習得する意識を育成することが望ましいと考えられる。

4.3 本研究に基づくFD活動への提言

現在、多くの大学において学生参加型のFD活動が行われつつある。しかし、授業評価への学生参加については、十分な事前準備が必要である。

学生と教員の両者にとってメリットのある学生授業評価の設計は、決して容易ではない。学生授業評価の設計と実施に際しては、その目的や方法について、十分な議論を重ねる必要がある。学生の授業評価観点を取り入れるだけでは、授業改善に繋がる有益な知見を得ることはきわめて困難である。このことから、学生と教員とのFD活動に対する意識や態度、また、期待される成果などについて、幅広い観点から意見交換を行うことが望ましい。学生との教員との意見交換を通して、両者の理解深化が促される。その結果として、学生の意向や評価観点を反映した、学生授業評価の設計に結びつくことが期待される。

5. 結論

- ・学生は、授業評価の観点として、知識や技能獲得の側面に加えて、単位取得に要する労力の側面にも注目している。

- ・学生は、学習内容が面白くわかりやすい授業、また、学習プロセスが重視されている授業を高く評価する。その一方、テストが簡単・評価が甘い授業を低く評価する。なお、教員の評価観点には、授業運営の要素に加えて、人柄など他の要素にも注目している可能性が示された。
- ・学生授業評価に学生が関与するためには、十分な事前準備が必要である。学生と教員との間で、学生授業評価に対する意見交換会を実施するなど、両者のFD意識の向上を促す取り組みが求められる。

参考文献

- Astin A, W.(1993) Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education, Phoenix, Arizona: ORYX Press
- 串本 剛 (2011)「序章 教育・学習過程の検証～論点・試論・課題」東北大学高等教育開発推進センター『教育・学習過程の検証と大学教育改革』東北大学出版会
- 文部科学省 (1998) 中央教育審議会答申 21世紀の大学像と今後の改善方策について ― 競争的環境の中で個性が輝く大学
- 文部科学省 (2005) 中央教育審議会答申 新時代の大学院教育 ― 国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて
- 文部科学省 (2009) 平成 21 年度学校基本調査
- 文部科学省 (2011) 大学における教育内容等の改革状況について
- 岡山大学薬学部 FD 委員会 (2008) 岡山大学薬学部 FD 白書, <http://www.pharm.okayama-u.ac.jp/life/content0004.html> (参照日 2013.8.6)
- 立命館大学教育開発推進機構 (2011) 学生 FD スタッフ活動レポート 2010
- 辻 義人 (2010)「対面説明場面における説明者の情報処理モデルの検討」日本教育工学会設立 25 周年記念シンポジウム『私の教育工学研究 ― この 10 年の潮流を踏まえて ―』, 22-29
- 山形大学高等教育研究企画センター (2004)「第 4 章 FD 学生モニター 大学生 FD 会議」『樹氷』FD 研究年報やまがた
- 山形大学高等教育研究企画センター(2010)「第 5 章 学生 FD 会議」FD ネットワーク『つばさ』

(付記)

本研究は、文部科学省科学研究費補助金 若手研究(B) (21730512:代表者 辻 義人)の助成を受けた。

【概要】

大学における代表的な FD 活動として、学生による授業評価が挙げられる。学生授業評価は、教員の授業改善の指針として実施されている。本研究は、学生自身が学生授業評価の設計と実施に関与する際の条件について、探索的検討を行うものである。

被験者に授業と教員の評価項目を作成させ、実際に質問票の配布と回収を行った。この結果、以下の3点が示された。①学生は授業評価の際に、知識や技能の獲得のみではなく、科目履修の容易さにも注目している。②話が面白くわかりやすい授業は評価が高い一方、評価が甘い・テストが簡単な授業は評価が低い。この傾向は、教員の評価とも一致している。③学生授業評価の設計に学生が関与するには、学生が授業評価の目的や意義について十分に理解する必要がある。日常的に、学生と教職員の間で十分な意見交換を実施することが望ましい。

キーワード：FD 活動，学生参加型 FD，学生授業評価，授業改善，アンケート調査